

郡上に想いを持って関わる人たち

関係人口で創る地域の未来の可能性

人口減少社会に突入した日本。縮小していく地域社会をどのように持続させていったらよいでしょうか。どこかの地域の人口が増えればどこかが減ります。しかし、確実に増やすことのできる人口があります。それが「関係人口」です。「関係人口」には、地域を元気にするいろいろなヒントが眠っています。今月号では、郡上市に住む人と都市に住む人の関係を結び直し、新しい視点で地域社会に刺激を与える「関係人口」のこれからの可能性について特集しました。

関わる人を増やす

元氣あふれる郡上市をつくるために、移住定住による人の呼び込みだけではなく「郡上市に関わってくれる人を増やす」、つまり「関係人口」に着目した取り組みも重要です。例えば、都市部に住む人が郡上という土地や人に魅かれて週末ごとに通い、頻繁に訪れることが出来なくても自分ができることで郡上を応援しようと思う人たち。こうした人たちは、移住や定住という括りではな

く、郡上市内での様々な場所や場面、人とつながることによって「気持ちの結びつき」が強まってくる。これまでの移住への段階は、主に観光などで郡上を訪れ、地域の魅力に触れ、頻繁な訪問により地域との関わりが生まれ移住につながるといった流れが比較的多かったと考えられます。ただ、これからは、移住のきっかけとなるバリエーションの増加とともに、これまでとはまったく違うかたちで郡上に関わりを持つようとする若者が増え、郡上市内で「関係人口」はどの

6月9日に東京都港区北青山のグローバルカフェで開催した「郡上藩江戸蔵屋敷」。郡上おどりのファンが集い、踊り下駄づくりや郡上の文化を学びました。

ようなかたちとなって表れているのでしょうか。

地域の魅力に触れる

白鳥町六ノ里地区では、平成19年から「六ノ里棚田にじいろプロジェクト」として、地元農家や体験民宿の会、農協、NPO法人等とくさんの人が関わり、田んぼづくりを柱としたイベントを実施し、活動に共感する多くの都市住民が生まれています。5月19日には、東京都港区の六本木ヒルズ屋上庭園で棚田の田植えイベントを開催しました。六ノ里棚田米生産組合（組合長・集山政治さん）から6人のみなさんが参加され、豊かな自然と棚田のある山里の風景を繋いでいく大切さを発信しました。市に関わりたと思う都市部の人たちは、こうした活動のベースにある「人や地域の魅力」に強く惹かれていと言えます。

多種多様な入り口

平成29年度から市の地方創生プロジェクトとして、港区を拠点に「郡上藩江戸蔵屋敷」事業を実施しています。今年度の第1回は6月9日（土）に「郡上おどりと踊り下駄」と題して、下駄作りや下駄にまつわる踊りの文化について知るワークショップを開きました。この日のワークショップは、

郡上に魅かれる若者

郡上市では、地方創生の重点的な取り組みとして「郡上カンパニー」というプロジェクトを昨年度から始めています。「郡上カンパニー」は、ひとことで言うと「郡上に定着して郡上の仲間とともに地域に根ざした仕事を創る」取り組みです。移住者の増加を目的のひとつに挙げていますが、仕事を生み出す「起業」や「関係人口」の増加を目指す取り組みでもありません。このプロジェクトを通じて郡上の魅力を知った東京で働く若者が、その後も自らの意思で郡上市に関わりを持ち続け、市内でのイベント開催などの企画、運営に関わられています。今年2月7日に和良地域協議会が開催した「和良の郷 未来に向けた意見交換会」や、3月

11日に相生地域づくり協議会が開催したドラマ伍風呂を楽しむイベント、さらに4月15日に愛宕公園で開催された「お花見マルシェ」は、彼らが自主的に企画した取り組みです。

関係性が築く価値

2月7日に「和良の郷 未来に向けた意見交換会」に和良おこし協議会とともに企画参加した大谷一夫さん、松浦朋子さん、土田智憲さん（いずれも東京在住）の3人は、昨年郡上カンパニーのプログラムのひとつである「共創ワークショップ」に参加されました。郡上に関わりを持つ中で地域との関係性構築に価値を感じられ、自分たちが磨き上げた和良地域を元気にする事業企画を地域の人々と一緒に発表しました。そして3人が進行役となって5つのグループでワ

ークショップを開き、地域資源を生かす事業プランを多く引き出しました。和良おこし協議会事務局長の加藤真司さんは「3人が意見交換時に発言された『外部の人間が無責任に行動したくない。ただ、外からの目線を見た可能性を発信していくことは、何らかの気づきの参考になる。私たちは、地域のみなさんとともに考えることで、いっしょに明るい未来を創るお手伝いができればうれしい』とのコメントがとても印象に残っている」と話されました。実際の住まいは東京や名古屋など離れていても、定期的に郡上に足を運び、この地域のことを一緒に考えて考え、ともに地域を盛り上げてくれる人が増えていくと、地域はどのように変わっていくのか期待が膨らみます。



5月19日に東京都港区の六本木ヒルズ屋上庭園で開催された「六ノ里棚田米」の田植えイベント。「郡上藩江戸蔵屋敷」事業の番外編として実施しました。



2月7日に開催された「和良の郷 未来に向けた意見交換会」



地域の未来を都市部の若者と一しょに描く和良おこし協議会の加藤真司さん（左）と地域おこし実践隊の山室恵さん（右）

関係人口の広がり

母袋地区には、名古屋市中で有機化製品を販売する会社が経営する有機農場があります。化粧品原料となるヘチマなどの栽培を手がけるかたわら、地元のみなさんと一緒に田植えなどの体験や稲刈り体験などの都市農村交流イベントを実施されています。社長を務める高柳昌弘さんは、「参加者は半分がリピーターです。母袋が好きになり通い始める人もいます。耕作放棄地の解消など、里山の再生を地域のみなさんと一緒に手がけることで、参加者の母袋地区に対する関わり度合いが深まっていくと感じています」と話されました。高柳さん自身も二地域居住をしながら、母袋地区に根ざした活動を進めています。



名古屋市の高柳昌弘さん。母袋地区に根ざした活動を進めています。

地域の価値づくり

地域に想いを寄せ、何らかの関わりを持ちたいと願う都市部の住民に向けて地域の魅力を発信するだけでなく、地域自らが多様なネットワークを生かし、「楽しい場面」を積極的に創っていくことが求められる時代になっていきます。地域の「活動磨き」を基本として、その積み重ねが「関係人口」に結びついているといえます。

人口減少が進み、縮小していく時代にあって、コミュニティでつながるエリアでの地域づくり活動を主とした地域活性化の取り組みは、そこで暮らす人だけで完結することが難しくなってきました。市では、移住・定住促進策を進めつつ、市民のみなさん一人ひとりの「この地域を何とかしたい」という気持ちを高め、魅力の醸成につながることを大切であり、その先に関係人口が生まれることを啓発していきたくて考えています。今年度、市では総務省から委託を受け「関係人口創出事業」のモデル事業を実施します。こうした事業を活用し、郡上市の「関係人口」が増加していく基盤づくりを進めていきます。「関係人口」の取り組みについては、市長公室政策推進課（☎67・1844）までお問合せください。

郡上市は総務省の制度を積極的に活用し「関係人口」づくりを進めています

「関係人口創出事業」のモデル事業への参加決定

総務省は、「これからの移住・交流施策のあり方に関する検討会」において、「関係人口」に着目した施策に取り組むことが重要であることから、平成30年度事業として『「関係人口」創出事業』を実施し、全国の自治体に公募を行いました。市は、この事業に応募した結果、提案内容についてモデル性が認められ、4月27日に採択を受けました。この事業を担当されている総務省地域力創造グループ地域自立応援課の鎌田総務事務官は、市のインタビューに対し、次のコメントをいただきました。

「関係人口という言葉が広がってきました。総務省のモデル事業である『「関係人口」創出事業』は、関係人口と呼ばれる地域外の人材が地域づくりの担い手となることを目的として関係人口の創出に取り組む自治体の成果を検証するものです。全国展開となるような普及性も期待しています。関係人口が移住へと発展していくこともあるが、途中でとどまる人がいても良いと思います。地域との関わりに価値を求める若者が増えているので、郡上市の取り組みには注目しています。」と事業の必要性を説かれました。



総務省地域力創造グループ地域自立応援課の鎌田総務事務官（左）と市役所職員（右）が協議している様子。

（株）電通の社員派遣を受け入れ地方創生を推進

市では、広告会社の（株）電通から社員1名の派遣を受け入れ、郡上カンパニー事業など地方創生の取り組みに従事してもらうことにしました。5月23日に市と（株）電通による協定書の交換式が行われ、同社の地方創生推進室に勤務する岡野春樹さん（29歳）が、来年3月末まで市で暮らしながら市長公室政策推進課に勤務してもらいます。今回の（株）電通の社員受け入れは、総務省の地域おこし企業人交流プログラムを活用して行うもので、民間企業で培われた専門知識やノウハウを地域の課題解決や魅力向上につなげる取り組みとして実施するものです。企業側には、民間として新しいかたちの社会貢献や人材育成、キャリアアップなどのメリットがあります。岡野さんは、6月から家族とともに市に移り住んで働いています。もともと大の郡上ファンである岡野さんは、「歴史や自然、伝統文化、そして郡上の人々の魅力や輝きを多くの人に伝えたい。プライベートでも郡上を深く知り、存分に楽しみたい。」と抱負を述べられました。岡野さんは、市の職員らとともに、地方創生のプロジェクト推進にあたってもらいます。



総務省の制度を活用して市の地方創生事業に取り組む岡野さん（株）電通との協定書交換式で市長と握手を交わしました。



母袋地区では、企業と地元が連携して耕作放棄地の有効活用を進めています。この中で都市住民との交流も活発化しています。

母袋地区の取り組み

地域に関わりたい都市部の人々と地域をつなぐ「場」や「場面」は、市内の至る所に多く存在しています。そのひとつ、大和町母袋地区の取り組みを紹介しましょう。

母袋地区は大和振興事務所から車で15分、国道156号から栗巣川に沿って約10kmほど東へ進んだところにある集落です。人口約100人の小さな集落ですが、地域づくり活動はとて活発です。活動の主役は「母袋わくわく会（会長・古清水満）」です。もともと地域で組織されていた地域づくり協議会の活動を引き継ぐかたちで平成28年度に発足しました。活動の拠点は上栗巣集会所です。地域おこし支援隊を受け入れ、都市農村交



母袋地区の地域づくりには、岐阜大学の先生や学生が継続的に関わっています。（学生の発表会の様子／母袋地区で）



「母袋ひな祭り」での餅つきイベント。「母袋ひな祭り」は、地域内外の人の支え合いにより21年間続いています。



母袋で農業を手掛ける企業が主催する有機栽培のハーブなどを使った蒸留会に参加する都市住民。

関係者が築く未来

母袋わくわく会で活動する地域おこし支援隊の吉田雄輔さんは、今年度から郡上カンパニーの事業として「都市と農村をつなぐどぶろく文化発酵人」というプロジェクトをスタートさせました。都市部からの移住者をパートナーとして迎え入れ、3年をかけて起業を目指します。そして、母袋地区も前述の和良町と同様に、「母袋」という土地やこの土地で暮らす人々に魅

かれた若者5人が自らの意思でこの地に何回も足を運んでいます。和良町や大和町母袋地区のように、地域づくり活動の企画や実践などへの、関わり自体に価値を感じる若者は、ここ数年確実に増えていくといえます。母袋わくわく会事務局長の野田秀幸さんは、「母袋地区では、今年で21年目を迎えた『母袋ひな祭り』をはじめとしたたくさんの活動を行っており、市外から参加される人も増えていきます。リピーターも多く、活動を支える側になる人もいます」と取り組みの重要性を説かれました。生活環境面では決して恵まれているとはいえない山間の集落において、継続的で自立的な地域づくりを実現している答えのひとつとして「関わりを持つ人」とのつながりがあるといえます。